

## 悲しみを乗り越えて

渡辺 司郎

東日本大震災から二ヶ月がたった。紙上にも被災者支援の様子を報ずる記事や励ましの広告などが多くなり、復興への掛け声や提案も散見する。だが、今日も朝刊一面の下方片隅には、死亡者数の他、行方不明8、881人との数字が居座っている。

岩手県にある義弟の生家も津波に襲われた。今も、彼の老母と兄の消息は不明だ。

「せめて、吾が手で葬ってあげたい……」

瓦礫の間を、水没の泥地を、避難所を、安置所を、捜し歩き続けた義弟の呻きに、私の心は潰れて言葉も出ない。

久々に静岡の自宅に戻った彼だが、来週には連れ合いと、近くに住む娘・孫娘二人を引き連れて被災地に向かうと、頬がこけ日焼けした顔で語る。家屋も田畑も家族も流されてしまった古里の姿をしつかりと目に留め、惨状をめいめいの胸に刻んで欲しいと願ってのことだ。老母が好きだった「おはぎ」と、兄が好きだった「銘酒」を携えて行くとも。

津波が残していったものは、何もない。想い出の品も、家族の団欒も、孫たちを誰よりも愛しんでくれた老母や兄の姿も。優しい人々が生きていた気配さえも……。たった一つの忘れものさえ残しては行かなかった。

いや、そうではない。残して行ったものがあつた。被災した其の地を訪ねる者たちの心に。底無しの悲しみを……。残した。

それでも、ひとすじの光明を信じたい。見よ、聞け。東北出身の小柄な男が、耐え切れないほどの悲痛を必死に胸底に押さえ込んで、ぼそぼそと言葉を発し始めたのだ。ガレキの他、命のカケラさえ見当たらない無彩色の古里の大地に、一株の緑の早苗を植え付けようとするかのように……。

「荒れ果てた父祖の地に立って、みんなで考えてみよう……。兄たちの痛恨の思いを……。二人の思いは俺が……。引き受ける。そして、そして……。来年の春には、田舎で……。みんなで芋煮会をやるう」

津波は命ある者の心に宿る再生への力までは奪えないのだ。行方未知れぬ老母や兄は、悲嘆に耐えて生きてゆく人々の心の中で、必ずや、これからも共に生きて行くに違いない。そして命は空前絶後の悲しみを乗り越えて、新しい世界へと歩んで行くのだ。